

第一章 資本主義における搾取の仕組み

——資本主義はなぜ「強力」か、対抗する力はどこから生まれるか——

1 はじめに——「道徳批判」ではなく「構造分析」へ

本書は、資本主義の不正義を糾弾するための倫理的宣言ではない。もちろん、低賃金、長時間労働、格差拡大、生活不安は、当事者の身体と精神を傷つける現実であり、怒りや抗議の根拠である。しかし、運動や政治が社会を実際に動かすためには、怒りを共有するだけでは足りない。社会の仕組みそのもの、すなわち「なぜそうなるのか」を、できる限りリアルに把握しなければならない。資本主義の現状は、三〇年前、あるいは一〇年前の状況とさえ大きく異なる。雇用の非正規化、長期停滞、資本の金融化とレント化、人口減少とケアの危機、そして国家と経済の軍事化など、資本主義は新しい局面に入っている。ここを見誤れば、私たちの言葉は人々の実感と噛み合わず、「正しいことを言っているはずなのに響かない」という断絶が生まれる。

そこで本章では、資本主義における搾取を「道徳的にひどい扱い」としてだけではなく、社会関係としての搾取、すなわち制度と構造としての搾取として論じる。問いは二つである。第一に、資本主義はなぜこれほど長期にわたり社会を支配し続けられるのか。第二に、多くの人が苦しさを感じていても「仕方がない」「代わりがない」と思わされてしまうのはなぜか。本章は、商品の仕組み、労働力の商品化、そして意識の支配（物神化）を順に解きほぐし、資本主義の根本矛盾とともに「強さ」の核心を押さえることを目的とする。

2 資本主義の基礎構造——商品経済の一般化と「価値」

資本主義社会の最大の特徴は、商品経済が社会のすみずみにまで一般化している点にある。食料、衣服、住居、交通、教育、医療、介護、情報、エネルギー——私たちの生活は、ほとんど例外なく商品を媒介として成立している。つまり、市場と切り離されては生きていけない現実がある。これは単なる経済現象ではなく、社会の編成原理である。

では「商品」とは何か。商品には二つの側面がある。一つは使用価値であり、これはモノの具体的な有用性、自然的性質である。豚肉が食べ物として栄養になる、布が身体を覆い寒さを防ぐ、といった性質は、市場以前から存在する。共同体内部で分け合われる食料や自家消費の生産物も使用価値は持つが、それらは市場で交換されない限り交換価値を持たない。

もう一つが価値（交換価値）である。これは、ある生産物が市場で他の商品と交換されるときにだけ現れる社会的性質であり、自然が生み出すものではない。自然は使用価値の素材を提供するが、交換価値それ自体を生み出すことはない。価値とは「社会的な関係」であり、物の内側に生得的に宿る性質ではない。

では価値の実体は何か。結論は明確で、価値の実体は労働である。ただしここでいう労働は、「私の労働」「あなたの労働」といった個別の労働でも、「米を作る労働」「自動車を作る労働」といった具体的有用労働でもない。商品経済が一般化した社会では、それら多様な具体労働が、社会的に平均化された抽象的人間労働として扱われる。価値は、この抽象的人間労働の量、すなわち社会的平均労働時間によって規定される。

この点を理解するために、まず普遍的な原則を確認しておく必要がある。どの社会にも、動員できる総労働時間は有限である。社会が存続するためには、食料、衣服、住居、道具などの物質的富が生産されねばならず、そのために有限な総労働時間が諸部門へ配分される。総労働時間が適切に配分されないなら、社会の再生産は破綻する。

ただし、この普遍的原則が現れる形は社会関係によって異なる。慣習や命令、宗教、共同体的合意が強い社会では、「何にどれだけ労働を割くか」があらかじめ決められやすい。そこでは、社会的配分の問題は存在しても、市場を通じた価値としては必ずしも現れない。

これに対して、市場社会には、社会全体の「単一の意思決定機関」が存在しない。生産単位は分立し、それぞれが見込みで労働を支出し、商品を市場に持ち込む。その商品が社会的必要に合致していたかどうかは、事前には確定できず、売れる（交換が成立する）という事後的結果を通じてはじめて確認される。この事後的な社会的調整を律する原理が価値であり、交換比率として現れる。言い換えれば、分立した生産の社会では、社会的労働の配分が「価値」という形で、しかも市場での成功・失敗という形で、遅れて、かつ強制的に現れるのである。

ここから、複雑労働と単純労働の関係も理解できる。プログラミング労働と清掃労働は具体的態様には異なるが、市場はそれらを同じ貨幣単位で評価する。賃金に差があるのは、複雑労働が単純労働の何倍かとして社会的に換算されているからである。重要なのは、この還元が理論家の頭の中の操作ではなく、現実の社会と経済が日々行っている「社会的換算」である点だ。市場は、無数の具体労働を抽象的人間労働として測り、価値として表示する。ここに商品経済の独特の力学がある。

3 労働力の商品化——搾取はどこで生まれるのか

資本主義の核心は、労働力が商品化される点にある。労働者は生産手段を所有せず、土地も工場も機械も持たない。だが商品経済の社会では、生存のために何かを売らねばならない。そこで労働者は、自らの労働力——労働する能力——を資本に売る。

このとき売られているのは「労働」ではなく「労働力」である。労働それ自体は、労働過程の中で初めて現実化する流動的な活動であり、完成した物のように市場に提示して交換できるものではない。商品として売買されるのは、一定時間、一定の条件の下で労働を行い得る能力である。ここが決定的に重要である。もし売られているものが労働そのものであるなら、賃金は労働の成果に応じて全面的に支払われなければならない。しかし現実の賃金はそうではない。労働者が受け取るのは、労働そのものの全価値ではなく、労働力という商品の価値である。

労働力という商品の価値は、他の商品と同様に、その生産に必要な労働時間によって規定される。労働力の生産とは、労働者を「生きて、働き続けられる状態」に再生産することであり、衣食住、教育、医療などの生活必需品・サービスの生産に要する社会的労働時間によって定まる。したがって、生活必需品の価値が下がれば、労働力の価値も下がる。逆に、生活費が上がれば、労働力の価値は上がる。ここには、賃金抑制政策と物価政策、社会保障の削減と生活コスト上昇が、労働力の価値をめぐる結びつく回路が存在する。

では、搾取はどこで生じるのか。ここが本章の中心である。労働者は労働力を価値どおりに売り、資本家はそれを価値どおりに買う。取引それ自体は等価交換であり、原理的には「だまし」が前提ではない。それにもかかわらず搾取が成立するのは、労働過程に入った後、労働者が自らの労働力の価値を再生産する以上の労働を行うからである。

例えば八時間労働のうち、二～三時間で労働者は自分の生活費に相当する価値を生み出す。残りの時間は、資本家のための剰余労働であり、そこから剰余価値が生まれる。この剰余価値こそが、資本の利潤の源泉である。利潤・利子・地代、そして今日目立つレント的收益も、究極的には剰余労働に根を持つ。資本は、労働者の剰余労働を取り込み、蓄積し、拡大再生産へ向かう。

搾取を拡大する方法は大きく三つある。第一に、労働時間を延長すること。必要労働時間が同じでも、労働日が延びれば剰余労働が増える。これが絶対的剰余価値生産である。第二に、技術革新や労働強化によって必要労働時間を短縮すること。生活必需品の生産に要する労働時間が短くなれば、同じ労働日でも剰余労働の比率が増える。これが相対的剰余価値生産である。第三に、労働力を価値以下で買いたたくこと。非正規、移民、下請け、ギグワークなどの領域では、労働力が価値以下で取引される傾向が強まり、等価交換の外観そのものが崩れる。

ただしここで注意すべきは、資本主義の搾取が多くの場合、自由で平等な契約の形をとる

点である。労働者は形式上「自発的に」契約し、資本家は形式上「正当な対価」を支払う。搾取は、暴力的強制ではなく、合法的・日常的な取引の内部に埋め込まれている。この不可視性が、資本主義を強力にしている重要な要素である。

4 搾取の歴史的展開——露骨さから高度化へ

十九世紀の自由競争資本主義は、搾取の露骨な形態を示した。長時間労働、児童労働、低賃金が一般的であり、多くの人が働きながら死んでいった。マルクス『資本論』が描いたのは、まさにこの典型的局面である。

二〇世紀前半には、資本の集中と独占化が進み、金融資本が台頭する。過剰蓄積と市場競争は帝国主義戦争へとつながり、植民地支配を通じて剰余価値が国際的に強奪された。同時に、労働時間規制や社会保険制度などが一定程度獲得されたが、それは労働者の闘いの成果であると同時に、搾取の体制を安定化させる補完装置としても機能した。

戦後の高度成長期には、大量生産・大量消費のシステムが確立し、剰余価値の一部が賃金上昇や社会保障として再分配された。しかしその代償として、労働強化と環境破壊、国際的な南北格差が拡大した。

そして現在、利潤率の低下を背景に、資本は新自由主義的な搾取強化へと舵を切った。グローバル化による労働者間競争、金融化（架空資本・擬制資本の膨張）、プラットフォーム独占を基盤とするレント資本主義化が進み、搾取は非正規、ギグワーク、移民労働、グローバル・サプライチェーンの労働へと再編されている。情報・知識・アルゴリズム・知財権・データの囲い込みは、地代的収益（レント）を生むが、それもまた搾取された剰余価値を前提として成立する。加えて、巨額の研究開発投資や寡占化に伴うリスク集中は、資本の蓄積サイクルを不安定化させる要因にもなっている。

5 物神化——資本主義が「強力」である第二の理由

資本主義の支配が強固なのは、搾取が見えにくいからだけではない。物神化（フェティシズム）という意識形態的な倒錯が、人々の認識の水準で支配を再生産するからである。物神化とは、人間同士の社会関係・労働関係が、あたかもモノ同士の自然な関係、モノに最初から備わった性質であるかのように現れる現象である。

商品においては、本来「分立した生産と事後的調整」という社会関係で生み出される価値が、商品そのものの自然な属性のように見える。ブランド商品が神秘性を帯びるのも、金融商品が「自己増殖する価値」として想像されるのも、この倒錯の一形態である。

貨幣はさらに強力である。貨幣はすべての商品の交換可能性を表象し、人と人との関係を「貨幣と貨幣の関係」にすり替える。結果として、「カネで買えないものはない」という感覚が社会を覆う。

資本は物神化の完成形態である。資本は、あたかも自らが利潤を生み出す主体であるかのように見える。しかし実際には、資本が増殖するのは、労働者の剰余労働が取り込まれるからである。にもかかわらず、「マーケットが決める」「マーケットには逆らえない」という言説が常識化するのには、資本が主体化され、人間が従属させられて見えるからである。

この物神化は、私たちの実践にとって重大な含意を持つ。資本主義の克服は、制度設計や政策論だけでは完結しない。意識の支配をほどく営み、すなわち「当たり前」を疑い、社会関係を可視化し、経験に根ざした学びを積み重ねることが不可欠である。

6 対抗する力はどこから生まれるか——再生産の政治化へ

対抗する力は、正しい理論の理解を必要とする。しかし理論だけでは人は動かない。勝ったり負けたりする現実の闘いの経験、労働運動・市民運動・生活を守る実践が、人々を鍛え、結びつけ、次の一步を生む。

ここで重要になるのが「再生産」という視点である。かつて労働力の再生産は、衣食住の確保、技能の更新、次世代の労働力の養育と教育といった意味で理解されがちだった。し

かし現在では、ケアや医療、介護、休息、文化、コミュニティの維持など、社会が存続するために不可欠な広範な領域として捉え直されている。再生産の危機は、単に生活の困窮にとどまらず、生産の場での抵抗や組織化そのものを困難にする。逆に言えば、生産領域の闘いと再生産領域の闘いが結びつくとき、相乗効果をもって社会を動かす力となり得る。本章の目的は、この後の議論の共通基盤を示すことにある。搾取の仕組みを「見える化」し、物神化の霧を払い、労働と生活の現場で感じられる違和感を理論と接続する。そのとき、私たちは「仕方がない」という諦念を超えて、社会を変える主体としての自信を獲得できる。以後の章では、長期停滞、金融化、レント資本主義化、そして国家と経済の軍事化を含め、現代資本主義の具体的な局面を順に検討していく。

(参考文献) 佐々木隆治『私たちはなぜ働くのか』『マルクス 資本論』、マルクス『資本論』第一巻、大谷禎之介『図解 社会経済学』、南亮進『長期停滞の経済学』